

地方建設企業は
底割れ状態

地方の建設企業や業界の現状をどのよう
ていいますか。

[illegible]

米田 入札制度の改定で一般価格が増上したが、その実態は最低限価格にひきめられ、採札者のしびれが激で、すく進んで強い企業には受注するという状況が顕出している一方で、「調子師格の弊路」を歩める本末の妄かかは、惜しい状況です。

工事現場での付帯作業が膨れ出し、次の受注インセンティブが与えられないという仕組みも底ざれていませう。品質の高い商品や納期に企業もうでなく、企業も一様に経路に陥り、業界全体が困窮していくことが最の問題点

日本は地震や台風など自然災害が多い上に、国土も脆弱（せいじやく）です。地域の風土をよく知り、社会基盤を適切に維持してきた建設企業も、そつでない企業も併存するという最悪のシナリオを書き直さない限り、社会資本を守ることは到底できません。

を全国の中核建設企業を元頭とする取組
みを展開して来た。

米田 地方建設記者の会（以下、各地で「
多角化」を推進建設業を振興する「建設ト
ランサフ・フォーラム」を組織して、本年に
一度のワークショップを組織した「建設ト
ランサフ・フォーラム」を断続的、アグリビ
タス分會、環境建設・文・森林林分會、
地域分會、新築住宅・文・森林分會、
科會も各地でワークショップを開き、地方の建設食
業を振興して来た。

分科会が岐阜で、2月にはアフリカ・ビジネス分科会が東京で、3月には地域づくり・新発想ビジネス分科会が富山でそれぞれフォーラムを開きます。そして、7月24、25日の両日は、3回目をとする「建設・トランザクション」を東京で開催することが決まっています。苦境に立たされた分科会も、新しい分野に挑戦する地方の元気な建設企業をたくさん紹介できればと、皆で思案を出し合っています。

キーワードは「地域ぐるみの複業化」

事例をいくつか挙げてください。

建設業者が、高齢者の暮らしを支える総合生産拠点を、阪急阪神東宝グループの「高齢者住宅」に展開して、高齢者の暮らしを支える。高齢者は、阪急阪神東宝グループの「高齢者住宅」に展開して、高齢者の暮らしを支える。

ー化やリフォーム事業を行いつながら「ディサービス」「あいむ」を運営しています。ノウハウ・ビスを蓄積し、今では「介護施設の建設は、介護経験のある北川建設に」をキャッチフレーズに、他社との差別化戦略を打ち出しています。介護だけでなく、地域貢献の一端としてコミュニティ・ハウスも展開しています。

農業に取組む建設企業も多いですね。米田　北海道の大町町では町役場が仲介して建設業協会と農業協同組合を結び合意させました。高齢化が進んで人手不足の農家と、公共事業が減り労働力が余剰になっている建設企業とのマッチングです。農業にしても建設業にしても、単一業態では成立しにくいのが地方の実状です。

建設業を続けながら、農業を起業して土木と農業の複業会社を立ち上げます。これを機に、農協と商工会と建設業協会が力を合わせ、作物を生産し、収穫した作物を市場に送り出すというフォーメーションを築きます。

[illegible]

福田内閣の最重要課題である地方再生について、昨年の11月に発表された「地方再生戦略」の中では、「農工商連携」という活性化スキームがクロスアップされています。地域の建設企業が多角化する中から身が出たという施策です。

建設業と林業とは相性が良さそうです。日本には木文化が根付いていて、木を利です。

本邦の木材の消費の増は、山の中に林業を支える人々の減少が原因でないため、利用で支えられている。つまり伐採が十分に切り増設が置き、林業機械化による作業道のな路網を備し、林業機械化による木材目録は上り、緑の質的範囲的利用で利用です。建設業の人地相即で建設業の使つてこなければ山の人も、思慮山で生活します。木材の安定供給がされれば、山内にも潤います。

林業の近代化を實現し、林業の自立的な発展を期すためには、将来に宝の山を残していくことを描くことは、将来に宝の山を残していくための投資と考えてください。日本の林業を自立型に戻すには千載一遇のチャンスです。その鍵を握るのは建設業です。林業の復興に勝る

國威マシンド王と、権江上、岐牛
(寫者提供) 飯古建設 魚船(黒)

治山地区はあひまふ、建設業と林業の複合産業が
 中間の仲介のつなびなど、
 無用・過剰な規制は
 排除すべき



会館施設「あむ」
 写真提供 北川建設（浪賀町）

排除すべき

——新しい分野に進出しようとする際、それぞれの業態をめぐる規制がたくさんあるようです。

[illegible]

『地方再生戦略』にも
ヒントあり

——地方の建設企業の将来について、どのように考えていますか。

木下氏の経営者としての「地味」な生活の根柢を成すのは気配を整えること。俗に「生活の土壌を整えておけば、何となく育ちやう」といふ文化、生命や財を出さずして定着した。一見、この視点は、時代がかわろうともし、忘れたいといひませう。昨午月に東京を訪れた「地味」出身の「地味」建設業の再生するヒントが感じられ、聞いています。

地方の建設業が、地域のために積極的に応じてきた動機は、かなり理屈整ったものです。国交省の官庁公開用文庫には「干支エシ」なとんとんでない時が来ると、懸念されて見せず。私も感ずる。白眉をうって、いらない、せやう。これからさうさ。日本には建設業が「要」だからです。